

## *The Heat of the Day* におけるボウエンの世界

川崎医療短期大学 英語教室

名木田恵理子

(昭和55年9月13日受理)

Bowen's World in *The Heat of the Day*

**Eriko NAGITA**

*Department of English, Kawasaki Paramedical College*

*Kurashiki 701-01, Japan*

*(Received on September 13, 1980)*

### 概 要

エリザベス・ボウエン (Elizabeth Bowen, 1899-1973) がその作品の中で描き続けてきたのは、人間の心の死の世界である。彼女はこの心の死を二十世紀という人間的危機の時代においてさけて通ることのできない一つの真理として作品の中に造形・定着させた。ところで1949年に発行された *The Heat of the Day* は戦時下のロンドンを舞台とし、ボウエンが戦争によってうけたインパクトを反映していて、ひびわれた人間関係と心の死という従来のテーマを描きながらも他の小説とは異なった趣きを持っている。これは戦争という巨大な激動が不毛の時代ばかりでなく、そこに住む人々をも動かしたためである。そこでこの点から *The Heat of the Day* の作品像を浮かび上がらせてみると、心の死がますます人類の運命として避けがたいものになっているというボウエンの人間社会への悲劇的な眼が指摘できるとともに、この作品のもつダイナミックな迫力が実感させられるのである。

### Résumé

The world of Elizabeth Bowen (1899-1973) shows us a tragedy which 'the death of the heart' in man weaves out. She searches for this 'death of the heart' through all her writings as a universal truth that human beings are destined to face in this century. By the way, *The Heat of the Day*, published in 1949, is set chiefly in wartime London and reflects her impact of the War. So, the world of the novel is indeed viewed through 'fractured relationships' and 'the death of the heart', but it cannot be said to be the same as in her other novels — we can see a new turn of hers in it. By what? — the massive convulsion of the war that brings the perfect destruction both in the between-the-wars wasteland and the people in it. This new aspect of the novel comes to suggest the tragic fate of human beings and their society dynamically.

### I

1940年、秋のロンドンにはドイツ軍による大空襲にみまわれ、アイルランド南部の Bowen's Court<sup>1)</sup> とイングランドの両方で生活を送っていたボウエンも戦時下の様相をまのあたりに

することになる<sup>2)</sup>。 *The Demon Lover*<sup>3)</sup> の序文にも ‘...in wartime, I felt the high-voltage current of the general pass.’<sup>4)</sup> とつづられているように、戦争がもたらした ‘a state of lucid abnormality’<sup>5)</sup> はボウエンに強烈なインパクトをもたらした。そこで彼女の興味をひいたのは、戦争そのものではなく、時代の激動でありそれにゆり動かされる人々の動きであった。これらの印象・風景はボウエンの内に新鮮な感動として蓄積されていき、 ‘a mass of subjective matter’<sup>6)</sup> となって彼女を創作へとかりたてていったのである。ボウエンは ‘... only as I am and feel can I write’<sup>7)</sup> というように、自分の感じたものを自分なりのやり方で描いていった作家である。戦争のもたらした風景や人の動きは、彼女自身のカメラアイを通して、随筆に、短編に書きとめられていった。

ここでとり上げる *The Heat of the Day* は1949年発表の長編小説としては10年ぶりに書かれたものである。戦時下のロンドンを舞台としたこの作品は、カール (Frederick R. Karl) がいうように<sup>8)</sup>、 *The House in Paris* (1935)、 *The Death of the Heart* (1939) に続く、fractured relationships を描いた trilogy の最終作ともみなされるが、既に述べたボウエン自身のインパクトによって趣きの異なったものとなっている。そこで、彼女のインパクトがどのような形で作品の中に——彼女の追求してきた運命的主題の中に——反映していったのかみていくことが *The Heat of the Day* の作品像を浮かび上がらせる上で必要となってくるのである。

## II

ボウエンは、ブルック (Jocelyn Brooke) の言葉をかりれば、

Miss Bowen has herself spoken (in the discussion from which I have already quoted) of her fascination with the ‘surface’ of life — not so much for its own sake, as for the dangerous sense which it gives of existing upon a thin crust beneath which lurks the bottomless abyss. The crust is, too often, liable to crack — and says Miss Bowen, ‘the more the surface seems to heave or, threaten to crack, the more its actual pattern fascinates me.’<sup>9)</sup>

というように、人間関係のひびわれていくさまを描き、それによって人間の内なる「深淵」の様相を表わすことに執着した作家である。

そして、この「内なる深淵とそれがもたらす様相」は、また同時代の作家が共通のテーマとしてかかえていたものでもある。即ち、二十世紀に入り、世界は不安定と破壊に脅やかされるようになり、十九世紀にはまだ存在していた romance は失われ、伝統や秩序は崩れ去る。特に第一次世界大戦後の世界はエリオット (Thomas S. Eliot) のいう the waste land であり、そこに住む人々は世の中の ‘beauty and the loving’<sup>10)</sup> を求めても得られず、不安と懐疑の中にさ迷うのである。多くの作家がこの「二十世紀における人間的危機」を描出した。あ

る者は絶望とともに、ある者は希望の光を見い出して。また、一人の人間の心の奥へと入りこむことで、或るいは様々な人間模様を写し出すことで。

ボウエンは、前述したように人間関係のひびわれの様相の中にこの命題を試みた。そしてこの命題が最もボウエンらしく描き出されている作品が *The Death of the Heart* だといえるだろう。この中で彼女は、Portia という少女の愛の挫折をプロットの軸として fractured relationships を描くことで the death of the heart という命題を表わしている。ここには加害者と被害者の対立はなく、いずれも傷つける者であると同時に傷つけられる者であり、それゆえその悲劇の様相はより深いといえよう。そして、この Portia を中心とする人間模様の図式はまた *The Heat of the Day* のそれとも符合している。この場合、Portia にかかわるのは Stella Rodney という上流階級出身の中年の女性であり、それをとりまく人々は *The Death of the Heart* の分身達である。— Stella の「破壊者」Harrison は crooked ではあるが evil な存在ではない。Harrison は Stella の中に自分ない home や feeling を見て引きよせられたのであり、Stella に拒まれることで生まれて初めての「感情の危機」を体験し、自分の「来なくてもよくてそして来ずにはいられない」状態を hell だと自覚する。また、過去に Stella を打ち砕いた前夫 Victor は Stella の中に「本当の愛」を見い出せなくて 'undoings and denials of all love'<sup>11)</sup> の中に死んでいった「被害者」でもある。Stella の「完全なる一体感」の共有者であり、破壊者ともなる Robert は、母親の人間性の欠如とダンケルク撤退での価値観の崩壊によって「傷つけられた」人間として描かれている。また間接的には Stella は Louie Lewis の「何か手本となるすばらしいもの」への希望を打ち砕くことにもなる。

このように、fractured relationships とそれによってもたらされる「心の死」の世界は、*The Heat of the Day* でも描出されていて、そこには、*The House in Paris*, *The Death of the Heart* と続くボウエンの世界が存在しているといえよう。

### III

ボウエンが描いてきたこの不毛の世界を1つの相とすれば、*The Heat of the Day* には更に新たな相が加えられたといえよう。それは、既に述べたように彼女の戦争体験がもたらしたものであるが、その相はタイトルの中にも見ることができる<sup>12)</sup>。即ち、heat は強烈で瞬間的な「熱エネルギー」、day はある特定の「時代」をさす語である。ならば the heat of the day とは「時代のエネルギー、最高潮へと達するその瞬間」をいうのであろうか。この場合、当然のことながら「時代」とは二十世紀であり、それが燃え上がる時は「戦争」の時である。ボウエンは戦争の中に「不毛の時代」が巨大なエネルギーのうねりとともに極限に達し、崩壊していくさまを見たのであろう。

この外界で進行する大破壊という相の前に fractured relationships による the death of the heart という内界で進行する小破壊の相はどのような展開をうながされるであろうか。

それは、中心となる Stella の愛の崩壊を見ていくことによって知ることができる。

まず、ボウエンは Stella を「不毛の時代」とともに生きる「失敗の世代」として運命づけている。

Younger by a year or two than the century, she had grown up just after the first world war with the generation which, *as* a generation, was to come to be made to feel it had muffed the catch. The times, she had in her youth been told on all sides, were without precedent — but then, so was her own experience: she had not lived before.<sup>13)</sup>

Stella が「時代の落とし子」であることは更に彼女の「現在」、そして彼女の「愛」の中でも明確にされている。結婚の早い失敗から彼女は親戚とも交渉を断ち、地方の名家出身という過去を捨て、この 20 年というものを国内外を転々として生きてきて、今は破壊の進んでいる明日のない都会で高級アパートを借り、「自分の物は何も無い」状態で、生活上の「規律」も「習慣」も持たず自由に暮らしている。また Stella の愛は、1940 年 9 月、空襲下のロンドンの現在のみで生きている根無草達が作った気楽で人と人との間の垣根のとれた lovable な社会の中で生まれている。そしてその始まりは、砲火の音にかき消されて 'What they *had* both been saying, or been on the point of saying, neither of them ever now were to know.'<sup>14)</sup> と最初の部分が切り捨てられ、二人の決定的瞬間に彼らの時計は一分ずつ違っていて決して完全には合わなかったという異常さの中に設定されている。彼らの愛自体「時代」と切り離せず 'afloat on this tideless, hypnotic, futureless day-to-day.'<sup>15)</sup> な状態の中で進んでいくのである。

このように Stella 自身の人生と彼女の愛は「時代」と密接に結びつけられている。それゆえ「時代」の崩壊への歩みは彼女自身の——不毛の時代の住人達の——運命として免れがたいものに思われてくる。

The time of her marriage had been a time after war; her own desire to find herself in some embrace from life had been universal, at work in the world, the time, whose creature she was. For a deception, she could no more blame the world than one can blame any fellow-sufferer: in these last twenty of its and her own years she had to watch in it what she felt in her — a clear-sightedly helpless progress towards disaster. The fateful course of her fatalistic century seemed more and more her own: together had she and it arrived at the testing extremities of their noonday. Neither had lived before  
....<sup>16)</sup>

そして時代のダイナミックな激動とともに進行するゆえに Stella の the death of the

heart への過程は、Portia に見るようなひびわれのなか 静かに「死」へと進行していくよどみではなく、人の一生の燃えつきる瞬間へと動いていく激流として描かれている。これはポウエンの世界の一つの変貌であるが、具体的にいえば、心の死に対するダイナミックな展開と決定的終末という2つの変化を生み出している。

まず、Portia の悲劇に比べ Stella のそれはより熾烈なものになっている。Portia は想い出を汚され、希望を打ち砕かれ、愛に裏切られ、求めようとしては拒絶されるという「挫折」を繰り返すが、Stella は自分がやっと 掴んだ愛 —— 彼女にとってはかけがえのない home —— を守ろうとして「戦う」のである。ポウエンの描くヒロインは打ち砕かれる者としては passive であったが Stella はその戦いにおいて「主体性」を持っている。このため限らない欲求不満のうちに涙を流しつづける Portia と比べ、魅力的な存在として読者を引きつけているといえよう。(毅然としていて自分というものを持っていて、優雅であって無駄のない、黒の似合う知的で洗練された Stella にしばしばポウエン自身の投影すら感じるのである。) しかしながら、それゆえ彼女の敗北は激しく決定的なものとして迫ってくるともいえる。実際に、時代と Stella の heat はプロット、シーン、文体の上にもまで及んでいる。即ち、コントラストのはっきりした展開と風景（風景はポウエンの世界において重要な要素である）及び無駄のない、所々歪んだ会話文が *The Heat of the Day* の特色となっている。特に Stella の「戦い」の部分（第2章、第7章、第12章での Harrison との戦い、第10章、第15章での Robert との戦いというように全体の約半分を占める）は全て夜の black-out した中で繰り広げられていて、他のやさしい光に包まれた部分と対照をなしている。そして第12章の夜の地下レストランは暗い死闘の末たどりついた limbo として強烈な場面を作っている。それはエジプトでの大勝利のニュースが伝わり、いよいよ時代が最後の陣痛を起こそうとしている時と呼応してより決定的な意味を与えられているといえよう。

Not a person did not betray, by one or another glaring peculiarity, the fact of being human: her intimidating sensation of being crowded must have been due to this, for there were not so very many people here. The phenomenon was the lighting, more powerful even than could be accounted for by the bald white globes screwed aching to the low white ceiling —— there survived in here not one shadow: every one had been ferreted out and killed.<sup>17)</sup>

ここでは強い光線が影をなくし、全てのあいまいさを打ち消し Stella の heat の瞬間を暗示している。このような明暗のはっきりした展開、情景は Portia の世界にはないものである。この点でも Stella の戦いは非常に高まりとともにあり、その結果の破壊は決定的意味が加えられているといえる。Stella の完全なる敗北は Robert との最後の夜（第15章）初めて流す涙によって象徴されている。それは戦いのさなかの涙ではなく、失ったものへの哀悼の涙、自分の動かしがたい宿命に対する涙である。ここには既に戦いの後の subsidence さえ感じられ

るのである。

That small picture, with its concourse of others, made her unknot her hands above her head and begin to weep, the more desperately because of the desperate wastefulness of tears now in face of the end of all. Now it was a question of counting the last of the minutes as they ran out into hours, the last of the hours as they ran out into tomorrow, which was already today, as they never had. All love stood still in one single piercing illusion of its peace, now peace was no more.<sup>18)</sup>

その夜 Robert は謎のうちに死亡し、翌日は連合軍の北アフリカ上陸のニュースが発表され、街には勝利の鐘が鳴り響き、まさに一つの時代が燃えつきた後の鎮魂歌として「終焉」を象徴している。

このように Stella の愛の崩壊は時代の heat という相を受けてダイナミックな展開と運命的決定の様相を浮き出している。Portia の悲劇が次第次第に高まっていく「序曲」なら Stella のそれはクライマックスの後の「終曲」を暗示しているともいえるだろう。こうして時代の極限への動きという1つの大きな相は fractured relationships や the death of the heart の存在する人間の相をゆり動かし支配している。それによってボウエンの命題とする世界はある意味では絶望的な決定を下され、また、ある意味ではエネルギーで active な動きを見せて我々を引きつけているともいえよう。そしてそこにはボウエン自身が excited してヒロインにのりうつったかのような迫力が生まれている。

#### IV

大きな時代のうねりがすぎ去り、世界は一掃されるが、破壊が大きければ大きいほどその後に来る regeneration は美しく輝いて見えるものである。終章の描写から、批評家の中には *The Heat of the Day* には the death of the heart に対する「明るい未来」——救済の道が示されているという者もいる。しかしながら果たしてボウエンはそこまで自分の命題を変貌させたのだろうか。——ここでいわれる「未来」の担い手は Stella の息子 Roderick と庶民階級の若い女 Louie Lewis である。Louie はよりどころを求めては彷徨し、Stella の危機と並行して危機を体験し、赤ん坊の生きる力によってそれを乗り越える。また Roderick は「過去の伝統」とうまく折り合うことで新時代に生きる権利を持つ。

確かにボウエンは Roderick や Louie の中に一つの時代が終わった後の「新生」を象徴したとも思える。しかしながらボウエンはそこに人類の明るい未来という積極的救済の意味を与えているだろうか。最後の Seale-on-Sea<sup>19)</sup> の情景は9月の平和な光に包まれ感動的ではあるが、中心部の徹底的暗さによってその明るさは実際以上の warmth<sup>20)</sup> となって見えるということも考慮に入れねばならない。Robert の死から2年後、砲火の中一人地上のアパートに

残っている Stella の心の中の空虚と人生に対する絶望の深さを見るとこの希望の光は非常に deceptive なものに思えてくるのである。戦前よりボウエンが追いつけてきた人間的危機の様相は、戦争という巨大なエネルギーによる完全なる壊滅によって解決のないまま逃れられないものとして一応のピリオドを打たれただけなのではないだろうか。

## V

ボウエンの作品の中で *The Heat of the Day* ほど賛否を分けたものはないであろう。それはこれまで述べてきたようにボウエンの世界に新たな相が加わったために起こった様々な変化に対する評価の違いが生んだものともいえる。

まず *The Heat of the Day* においてボウエンは素材の大きさ故に彼女の資質のある部分を犠牲にしたのではないかという論がある。——ボウエンの資質が登場人物の間を流れる光となって細やかにその動きを描出していく感性というならばそうもいえよう。その結果、もたらされる feminine, gossipy, shadowy な雰囲気はここでは二次的なものとなり、明暗のコントラストのはっきりした世界が生まれているからである。戦争がボウエンに与えたインパクトは彼女の内にある種の感覚の麻痺を起こさせたのかもしれない。しかし、それは、あるものを犠牲としながらも別なもの——強い訴えかけを持った作品を生み出させたともいえるだろう。

また *The Heat of the Day* は「戦争小説」と「恋愛小説」という二つの要素に二分されているところに欠陥があるともいわれている。しかし、果たしてこれが「二分」であろうか。これまで見てきたように *The Heat of the Day* の二つの相は重ねられ一本の強力な線となって迫ってくる。「戦争」と「恋愛」は the heat of the day の中に分断ではなく融合として一つの運命的主題を表わしている。あえていうなら戦争と恋愛はその激しさにおいて同質であり、どちらも戦いという点においてこの作品は「戦争小説」だといえるだろう。

更に、プロットについて小説全体がちりぢりばらばらなくつかの断片から出来上がっているような散漫な印象を与えるという批判もある。しかしながら、今にも暮れようとしている1942年9月の Regent's Park の最後の平和なひとときに始まり、「夜が上げ潮となって押し寄せてきて」暗い闘いが始まり、クライマックスを迎え、燃えきって subsidence が徐々に起こっていき、1944年9月の平和な夕暮によって終わりを告げるという一つの主旋律をこの作品は持っている。間に平和の象徴としての Mount Morris<sup>21)</sup>、現実背をむけることで生きのびていこうとする Nettie との会見などという挿話が入るが、それとても Stella を中心とする人間模様を描く上で欠かせぬものであり、一つの楽器で演奏される曲よりもオーケストラの演奏する曲の方が重層的効果があることは否定できない。

ボウエンは冒頭の部分に様々な人々が集まってつかの間の平和な時を味わう野外音楽会の情景を置いているが、そこであふれでるオーケストラ音楽のように、*The Heat of the Day* は二つの相の中に一つの命題をかなでいて、彼女が気質とするものの枠を越えて流れのある盛り上がりのある作品となっている。ボウエンの世界の悲劇の様相は、時代の動きという新たな

相によって強い訴えかけを持ってここに描出されたといえよう。

稿を終えるにあたり、ご指導くださいました岡山大学文学部英語英米文学科主任・富士川和男教授に深謝の意を表します。

#### 注

- 1) ボウエンが1928年父親から継承した大邸宅。
- 2) *Collected Impressions* の中に *London, 1940* という9月の空襲があけたロンドンの或る朝の心象風景を描いた文が見られる。それによると当時ボウエンは Regent's Park 周辺に住んでいて、実際に空襲、避難、疎開を経験している。また、この中の描写は *The Heat of the Day* の第5章とも重なっている。
- 3) *The Demon Lover* は、1945年発表された短編集であり、主に1941年から1944年の戦時下のロンドンで書かれた作品が集められている。この短編集の“Preface to the American Edition”として書かれたものが、評論集 *Collected Impressions* の中におさめられている。
- 4) Elizabeth Bowen, *Collected Impressions* (Knopf, 1950), p.52.
- 5) *ibid.* p. 48.
- 6) *ibid.* p. 249.

“He [a novelist] is forced towards his plot. By what? By the ‘what is to be said’. What is ‘what is to be said?’ A mass of subjective matter that has accumulated — impressions received, feelings about experience, distorted results of ordinary observation, and something else.”

- 7) *ibid.* p. 52.
- 8) Frederick R. Karl, *A Reader's Guide to the Contemporary English Novel* (Thames & Hudson, 1963), p. 128.
- 9) Jocelyn Brooke, *Elizabeth Bowen* (Longmans, 1952), p. 9.
- 10) John Galsworthy, *The Forsyte Saga* の結びの文章は二十世紀の人々の状態を示唆して有名である。

— “He might wish and wish and never get it — the beauty and the loving in the world.”

- 11) Elizabeth Bowen, *The Heat of the Day* (Knopf, 1949), p. 147.
- 12) *The Heat of the Day* は邦訳では「日ざかり」として紹介されているが、日本人がその語感に持っている「日の照りつける最中——真夏の昼下がりを思っでは作品像を浮かび上がらせることはできないだろう。この the heat of the day という言葉は「人をして疲れさせ、かりたてずにはいられないもの」というイメージを与えるようである。ボウエンに近いところでは、G. Orwell が *Burmese Days*, xix の中で ‘No one, Oriental or European, could keep awake in the heat of the day without a struggle....’ と述べているし、S. Maugham の *The Painted Veil*, xxviii には「明け方に出発した人は the heat of the day を迎え、路傍の宿に shelter を求める。」とある。
- 13) Elizabeth Bowen, *op. cit.*, p. 24.
- 14) *ibid.* p. 104.
- 15) *ibid.* p. 109.
- 16) *ibid.* p. 147.
- 17) *ibid.* p. 252.



- 18) *ibid.* pp. 305-6.
- 19) Louie の故郷で、彼女の両親は爆撃によってそこで命を落としている。*The Death of the Heart* でも出てくる場所で、ボウエンが幼年時代をすごした Hythe がモデルとなっている。
- 20) ボウエンは S. Maugham への書評の中で “We cannot consider his works as the great art, because the great art must have its own warmth.” と述べ、悲劇的な小説の中にも warmth を与えるという姿勢を明らかにしている。
- 21) Roderick が相続することになったアイルランド南部の邸。